

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	史学	専攻
研究代表者 (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号			氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年 (学生番号: 19PC001B)			王 尊龍 印	
指導教員	所属部局・職			氏名	
	文学部・准教授			四日市 康博 印	
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	近世琉球における渡唐使節の応制詩について				
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2020年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年			氏名	
	文学研究科・史学専攻 博士後期課程・1年			王 尊龍	
研究期間	2019 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、まず近世以降における琉球漢詩の発展をもたらした政治的、社会的要素に対して多角的な考察をし、古琉球から近世期にかけての琉球王国における漢詩受容の実態を通時的に解明した。

次に清時代に行われた琉球使節による応制詩献上に関する諸問題に焦点を当て、その制度的展開を分析し、清朝はいつから、どのような方式で琉球を含む各国の朝貢使節に応制詩の進呈を求めていたのかを検証した。

最後に朝鮮・ベトナム・中国史料にみえる琉球使節の作詩能力に関する記述を、現存する琉球応制詩の平仄式検証の結果と照らし合わせることによって、琉球使節による応制詩献上の実態に迫ることを試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 琉球王国 } { 漢詩受容 } { 応制詩 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

近年、琉球王国の漢詩に関する新史料が相次いで刊行され、研究をとりまく条件は大きく改善したが、それに関する研究は決して多くはない。従来の研究は、琉球漢詩の内容の鑑賞や時代背景の解釈に偏向しており、漢詩を社会史研究の補完史料として扱う傾向があった。しかし、漢詩は一種の文学形式でありながら、外交の舞台で各国の官僚や知識人に重んじられてきたため、前近代における東アジア外交上の共通言語とも言える。そのため、琉球漢詩のテキスト表現のみならず、その外交上における機能についても、より研究を深める必要がある。

本研究で対象とする応制詩は、外交上における漢詩の機能が表れた典型的な例とも言える。応制詩とは、君主の命によって臣下が賦して献上する詩のことをいうが、清時代においては皇帝が主催した行事や宴会での盛況を題材に作詩されたものや、皇帝の御製詩に和韻するなどの形で作詩されたものが多い。清と名目上の君臣関係を結んだ琉球や朝鮮、越南(安南)などの国からの朝貢使節も、この類の行事に参加するにあたり、漢詩の進呈がしばしば要求されていた。

こうした性質を帯びている朝貢使節の応制詩は、清帝国を中心として築き上げられた政治文化の一端を伺わせる貴重な史料と言っても過言ではない。そして、現在山形県米沢市市立米沢図書館に所蔵されている『御詩和韻集』など、近年公開、出版された史料の中で、琉球渡唐使節が賦した応制詩が数多く収録されている。それにもかかわらず、応制詩はこれまで渡唐使節の北京での外交行動を検討する素材として用いられることがほとんどなかった。

そこで本研究では、前述した問題意識に基づき、下記の二つの課題を設定して、それぞれ考察した。

①琉球における漢詩の本格的な受容が始まった時期の特定

本研究は十八世紀以降の琉球使節が清朝皇帝に進呈した応制詩を主な研究対象として取り上げるが、「研究の概要」に示したとおり、当時の琉球使節の作詩能力をより正確に把握するため、その時代の琉球における漢詩受容の状況および、それに至る経緯を確認しておく必要がある。

しかし、従来の研究では、琉球漢詩という日中両国の渡海者がもたらした外来文化の受容を論じる際に、日本と中国を含む東アジアの地域的な政治、文化環境に触れずに琉球内部の要因だけに求める傾向がある。そして、日本禅林と深く関わっていた琉球僧と中国系の渡来人である久米村人のそれぞれの作詩は、古琉球から近世琉球期にかけて同時並行的に展開されたのか、この二学統は時代によってどの程度に琉球王国の文教事業に浸透したのか、などの問題については必ずしも明確化されていない。

そのため、研究代表者が今年度に『アジアの海を渡る人々—16・17世紀の渡海者—』(春風社、刊行期間未定)に投稿した論文では、日、朝、中三国の史料を使用し、十五世紀から日中両国で起きていた文学思潮および、それが琉球に与えた影響を分析した上で、古琉球から近世期にかけての琉球王国における漢詩受容の実態を検討した。それによって得られた知見は主に次のようである。

(1)琉球王国における漢詩創作は、僧門と久米村という二つの学統の下で同時並行的に展開されていたのではなく、近世以前の作詩は、ほとんど琉球の僧侶集団に限定されていた。彼らは、主に五山禅林の詩の作風と文体を継承していたが、明代中国で起きた復古主義の文学思潮から影響を受けた痕跡が見られない。そして、冊封使の記録や現存作品に対する平仄式分析の結果などから見ると、この時代の琉球漢詩はまだ比較的低い水準に留まっていたといえる。

研究成果の概要 つづき

(2)琉球における漢詩の本格的な受容は、十七世紀中葉以降の近世期から開始されたものである。国家構造の転換を遂げた近世の琉球王国は、体制教学としての儒教の導入や孔子廟の建立など、「中国化」を推進するための政策を打ち出した。これにより、中国に対して自らの「忠順な朝貢国」の性格を示しながら、「幕藩制のなかの異国」として日本に琉球の独特性を効果的にアピールすることが可能となった。こうした大きなうねりの中、漢詩および、それと密接に関わる東アジア的な政治文化の導入も、必然の帰結なのではないだろうか。それを実行する主体は、久米士をはじめとする士族階層である。一六八三年に冊封使への漢詩献上は、久米村をはじめとする士族漢詩の嚆矢であり、士族が僧侶の代わりに王国の外交、文教事業を主宰し始めることの先触れであった。十七世紀後半以降、説法の禁止、寺院の知行高の減少、勸進・托鉢行為の禁止などの政策の実施により、琉球の仏教勢力が極めて弱体化し、さらに一七一四年に、それまで行われていた京都五山への留学僧派遣も、薩摩藩内に限定された。結局、近世以降の琉球漢詩は完全に「士族の漢詩」になり、その隆盛を迎えたのである。

②琉球使節による応制詩献上の実態の分析

今年度に行った学会発表では、近世琉球における応制詩の外交上の応用に焦点を当て、朝鮮・ベトナム・中国史料にみえる琉球使節の作詩能力に関する記述を、現存する琉球応制詩の平仄式検証の結果と照らし合わせることによって、十八世紀中葉以降に行い始まった朝貢使節による清朝皇帝への応制詩献上の実態に迫ることを試みた結果について報告した。こうした作業を通じて明らかになったことは下記のとおりである。

(1)十八世紀の清朝にとって、中国流の自国観や中華の認識を維持する上で必要であったのは、諸外国がそれを受け入れているという「外観」だけであり、そこで外国使節が漢詩を作れることが、こうした中華の支配秩序を顕彰するための最適な証であった。そのため、琉球側は名義的な宗主国である清朝に対して、自らの「同文の国」としての性格を十分にアピールしなければならなかった。その表現は、応制詩の献上である。

(2)琉球側の進貢使と朝鮮やベトナム使節との間で、漢詩の唱和を含む多様な交流が行われていた。こうした交流の様子に関して、朝鮮とベトナム使節の「燕行録」に大量の記録が残されている。一方で、先に述べたように、『御詩和韻集』などの琉球側の史料に収録されている作品を見ると、琉球使節の応制詩は相当高い水準に達していたが、朝鮮やベトナム使節の記録（「燕行録」史料）においては非常に評価が低かった。このような史料間の食い違いと、それをもたらした原因についてはまだ不明な点が多い。それを解明するために、研究代表者はまず、『御詩和韻集』と『琉球正使毛国棟詩』、琉球の家譜史料そして朝鮮・ベトナム側の「燕行録」史料に収録されている琉球使節の応制詩を網羅し、平仄式の分析を行い、琉球使節が作詩した応制詩がいかなる水準に達したのかを検証した。そして、朝鮮・ベトナム・中国史料にみえる琉球使節の作詩能力に関する記述を整理し、平仄式検証で得られた結果と照らし合わせた。それにより、こうした史料記述の矛盾を生み出した原因は、清代における琉球使団には、応制詩の代作が存在する可能性が高いと推測した。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

該当なし

② 図書

王尊龍「琉球王国における漢詩の受容と展開を再考する」上田信編『アジアの海を渡る人々—16・17世紀の渡海者—』(春風社、刊行時期未定、原稿受理済み)

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

該当なし

④ その他

学会発表

- (1)「清代における琉球使節の応制詩献上と代作」、琉球史若手の会、東京大学駒場キャンパス、2019年6月19日。
- (2)「近世琉球における渡唐使節の中の草稿代筆者—応制詩の作成と献上を中心に」、2019年度立教大学史学会大会、立教大学池袋キャンパス、2019年6月22日。
- (3)「琉球王国における漢詩の受容と展開を再考する：日中文壇からの影響を中心に」、日本学研究所第62回研究例会「第5回 海外の日本文化研究-その動向と可能性-」、立教大学池袋キャンパス、2019年7月13日。